

# 本と子どもと大人をつなぐ場所 “本の城” (IJB) での 20 年

平成 21 年 10 月 24 日

講師：ガンツェンミュラー 文子

## 1. はじめに

どうも御丁寧なお言葉をありがとうございました。皆様、こんにちは。私、今御紹介にあずかりましたガンツェンミュラー文子でございます。10月、11月は日本では「文化の秋」といわれまして昔からこの季節はいろいろな文化的な催物が多くて忙しい季節ですけれども、今日はこちらの方にお越しくださいましたこと、大変嬉しく思っております。

国際子ども図書館は皆様もよく御存じのように、2000年に盛大な式典を伴って開館、そして2年後には全面開館されました。そのどちらの式にも私は参加させていただくことができ、初代館長亀田邦子さん、2代目館長富田美樹子さんにごあいさつし、喜びを共に味わわせていただきました。2002年に資料室を利用いたしましたけれども、帰りがけに、たまたま入口に面する通りに、二人のお母様と、三人の、小学校高学年と思われる男のお子さんたちが前を歩いておりまして、その内の一人の男の子が「落ち着いて本が読めたあ！」とのびのびと嬉しそうに語っていたのが、今でも深く印象に残っております。子どもながらも図書館を知的なオアシスとして感じ、読書の醍醐味でもある、心地よい緊張感を味わったのだらうと私は思いました。

さて、その後も3代目の村山隆雄さん、そして現在4代目の齋藤友紀子さん、また、館員の方々との交流を通して、親しくさせていただいておりますが、今日はその国際子ども図書館にて、私が20年勤めました、ミュンヘン国際児童図書館についてのお話をさせていただくことは感慨無量です。御招待をしてくださいました、齋藤友紀子現館長にはとりわけ感謝いたします。

ミュンヘン国際児童図書館はドイツ語で **Internationale Jugendbibliothek**、略称がドイツ式発音で **IJB** (イーヨットベー)、アイジェイビーではなくて私たちはイーヨットベーと申しております。英語は **International Youth Library**、略称 **IYL** と云いますけれども、これより図書館のロゴに合わせて、ドイツ語発音で「**IJB**」を使わせていただきます。

これから大変失礼ですけれども座って話をさせていただきます。

## 2. 講演の構成

本日の話は内容別に5部に分け、第一部は「本の城」という題で、現在のIJBの概要、第二部は、IJB以外に、地元ミュンヘンで行われている読書推進活動例に2、3触れ、第三部では、そのような活動が自明ではなかった、第2次世界大戦直後にさかのぼり、ミュンヘン国際児童図書館・IJBの誕生と創業者イェラ・レップマンについてお話しいたします。第四部は「IJBの活動」と称し、レップマン時代以降のIJBの発展と現在の活動状況を私の経験をも交えて御紹介いたします。

そして最後の第五部では、IJBは本年、開館60周年を迎えましたので、6月に行われた式典と関連行事を皆様に見ていただきたいと思います。

## 3. 第一部 「本の城」

### 4. ニュンフェンブルク城

会場の皆様の中にはミュンヘンに御旅行され、このニュンフェンブルク城を訪れた方がいらっしゃるかと察しますが、17世紀末から18世紀にかけて建てられたこのバロックのお城は代々バイエルン地方を治めた、ヴィッテルスバッハ家の夏の離宮です。第1次世界大戦後、ドイツはワイマール共和国となり、バイエルン王国も崩壊しましたので、それ以降はバイエルン州の所有となっております。

### 5. ニュンフェンブルク城庭園

IJBは創立時の1949年から1983年まで市の中心地にありましたが、蔵書が増えて、現在の、西の地区に建つ中世後期の狩りの城、ブルーテンブルク城に移転しました。ニュンフェンブルク

城が築かれる際に、お城から、お狩り場一帯のはるかな向こうに、ブルーテンブルク城を眺めることができるように設計されたそうですが、数百年も経った今では城の庭園や元お狩り場の樹木が大きくなって、視界を遮り、小さなブルーテンブルク城は見えなくなっていました。今、御覧の写真で、城の階段の灯籠、左端の前方の少しへこんだところに、かつて、ブルーテンブルク城が見えたわけです。

ドイツでは州や自治体が所有する歴史的建造物を修復する際、多額な費用を要しますので、その建物の使用目的、中味となるものを充分吟味した上で決定します。かつてはアルブレヒト3世の狩りの館であり、その後、ニュンフェンブルク城が建築中には当時の王妃も仮住まいしたブルーテンブルク城も、20世紀に入るとかなりの荒廃状態にありましたので、バイエルン州当局は城の修復と共に歴史建造物に指定し、かつ、内部を図書館用に改築しました。この点は明治時代にネオルネッサンス様式で建てられた、こちらの国立国会図書館旧上野支部が、国際子ども図書館として生まれ変わった経過と共通した点があります。

## 6. ブルーテンブルク城（ミュンヘン国際児童図書館）

中世後期のブルーテンブルク城です。1983年より、国際児童図書館として機能し、今日に至っております。かつては川や池などの水に囲まれて、「水の城」とも呼ばれていましたが、池はなくなり、修復時に復元工事がなされ、風景が昔に戻りました。図書館を訪れる子どもたちには遠足をも兼ねることができます。この点も環境に恵まれた、東京の国際子ども図書館と共通しております。

## 7. IJB 概要 1

ミュンヘン国際児童図書館は1996年より財団法人となりましたが、財源は創立当時から変わらず、運営費の50%はドイツ連邦政府ファミリー省が担い、残りの50%はバイエルン州文部省とミュンヘン市文化局が分担しております。しかし、児童書の収集はこれもまた創立以来、主に各国の出版社からの御献本という、御協力によって成り立っています。児童書専門図書館としての主な事業、活動としまして、

(1) まず外国人児童文学研究者招致制度があり、毎年12人から15人の児童文学に関わる外国人が3か月間招待され、IJBの蔵書を利用して研究ができる仕組みになっております。この奨学金はドイツ連邦政府外務省が支給しております。

(2) 次は児童文学の促進と普及のために、又、類縁機関、出版社などとの交流のため、ポローニャ及びフランクフルトブックフェアに参加しております。

(3) 収集した図書をもとに、各種の展示会を催し、巡回展示会は国外にも行きます。児童文学専門家対象のシンポジウム、ワークショップ、児童生徒を対象にした学校プログラム、貸出室では学校の終わった午後の時間帯に、誰でも参加できるプログラムを組んでいます。

職員数はフルタイム、パートタイム、職業実習生、研修生など合わせて30余名になっており、その他に言語部門非常勤嘱託、学校プログラム専任フリーランスなどがあります。大展示会や小展示を軸にして、1クラス単位の学校プログラムにはかなり力を入れています。後ほどたくさん例を御紹介します。

施設として研究図書室や子ども室があり、子ども室は一般貸出室、絵画アトリエ、印刷工房、外国語会話教室、音楽クラブなどから成っています。又、90年後半からリーディング・ミュージアムも併設されました。

## 8. IJB 概要 2

### IJB 所蔵資料

ではIJBの所蔵資料について簡単に御説明します。創立当初の外国人の子どもも母国語で本が読める子ども図書館から、児童文学専門図書館として発展し、現在蔵書数は60万冊に達しつつあり、130言語に至ります。児童文学資料閲覧室、IJBではStudy Library, 研究図書室といっておりますが、ここで、古書も含めて、おおかたの蔵書を利用することができます。研究図書、参

考書の蔵書数は約 3 万冊、児童文学関係専門誌は約 250 タイトル。児童書関係ポスターも収集し、現在は約 4 千点を数えております。

### 資料検索

1993 年から OPAC（オンライン閲覧目録）に変わり、今まで遅れていた旧カード目録の電子化も来年はかなり進む予定です。特別コレクションもいくつかはすでにオンライン検索が可能です。

### IJB 特別コレクション

特別コレクションを簡単に御紹介します。

#### ・ ジュネーブ国際連盟（国際連合の前身）児童書コレクション

1928 年より国際連盟は教育的見地から児童書の収集を開始、各参加国から最も優れた作品を送らせました。58 カ国 3 万冊にいたり、主に児童文学書と絵本ですが、その中には、国によってはもう残っていないと思われる本が多数含まれております。

#### ・ シュルツコレクション

18、19 世紀の西洋の冒険小説が中心をなし、特にロビンソー・クルーソーとロビンソナーデ、カール・マイ作品のコレクションはドイツでも有数の優れたコレクションです。又、同様に 19 世紀のメルヒェン、伝説の本は、IJB の現代の国際的蔵書と併せると国内では最大級のコレクションです。最古の蔵書は 1574 年刊、ラテン語の『ライネケ狐』です。各ジャンル合わせて約 1 万 1 千 4 百冊です。

#### ・ ミシュケコレクション

これは 7 千冊にいたりまして、18 世紀から 20 世紀初頭までの教育的な児童図書、児童文学専門書、専門誌、ABC の本、童謡などから成っています。

#### ・ 児童書関係ポスター

先ほども申しましたように 1978 年から収集し始め、現在各国併せて 4 千点になっております。その内、約 50 点は旧東独時代の児童劇に作成されたヴェルナー・クレムケの作品です。

#### ・ ペール・カストール・アルバム

82 冊のセットになっており、ペール・カストール・フラマリオン社が 1930 年代から 50 年代に刊行した、前衛的な挿絵のついた児童書コレクションです。

#### ・ カーペンターコレクション

1850 年から 1940 年に出版された英米（主に英語）の冒険小説が収集されています。700 点のうち、雑誌も含まれています。

#### ・ ナチズム（民族社会主義）と軍国主義の児童文学

ナチズムに迎合した高学年向け児童書 300 冊、児童雑誌 18 巻、第一次世界大戦中とそれ以前の国粹的、軍国主義的児童書 100 冊から成ります。1945 年後、米軍政府がバード・ゴードスベルグ市の図書館数館から取り除いた児童書を基に他資料が追加されました。

#### ・ ミュンヘン一枚絵

19 世紀後半に発行されたミュンヘン一枚絵は 50 巻、1 千 2 百枚。全巻そろっております。

#### ・ 『不思議な国のアリス』コレクション

各国版と翻訳版約 250 冊から成ります。

### IJB リーディング・ミュージアムと付随コレクション

このほかに、リーディング・ミュージアムに属するコレクションがあります。ミュージアムに関してはこの後すぐに御説明しますが、作家、人形劇脚本家・演者であったハインリッヒ・マリア・デンネボルクの遺品の一部が IJB に常時展示されており、その中にドイツの子に大人気のカスパル人形劇の台本などが多数含まれております。

ミヒャエル・エンデ文庫は、エンデが仕事のため収集された 3 千冊の本です。海外版初版 420 冊も収蔵、展示しております。作家のジェイムス・クルスに関しては海外版初版 320 冊となっております。

エーリヒ・ケストナー著作コレクション。これは 2 千冊を超えます。そのうち海外版初版は 250 冊を数えます。

リーディング・ミュージアムにもう一つ絵本作家ビネッテ・シュレーダー・キャビネットがありまして、ここにはビネッテ・シュレーダーが収集した 3 千点の絵本があります。では図書館の施設を御案内します。

## 9. 本館ロビー

事務棟としての本館のロビーです。常時、テーマ、あるいは国別の児童書や作家、画家、出版社を紹介する展示をし、講演会場にも使っております。

## 10. 回廊ギャラリー

城の防衛通路を利用した回廊ギャラリーです。こちらのほうも常時展示をいたしております。今年ではエリック・カール生誕 80 歳にあたり、その記念展示会の一部です。

## 11. 研究図書室

高校生から利用できる研究図書室です。高校生ともなるとやはり論文などを作成しますので、それが児童文学に関係しますと、彼らも時々やってまいります。研究書類は開架式に置かれています。奨学金制度で研究滞在をされている方々は、ここに御自分の席を決めて 3 か月間研究をされるシステムとなっております。

## 12. 子ども室（貸出室）

子ども室では 13 言語に及ぶ 2 万 5 千冊の児童書を一般貸出しています。出版社が複本を送ってくださいますと、その一部がこちらの貸出室に回せます。ドイツ語、英語、フランス語、ギリシャ語、イタリア語、日本語、オランダ語、ペルシャ語（イラン）、ポルトガル語、ロシア語、スウェーデン語、スペイン語、トルコ語、などです。ちなみに日本の本は 4 番目に利用頻度が多いようです。貸出室では午後、児童サービスとして、ストーリーテリング、工作などの催しをします。ドイツ語、英語、フランス語の絵本のみをまとめた絵本室もあります。

## 13. ミヒャエル・エンデ・ミュージアム

先ほど触れましたリーディング・ミュージアムの一つで、ミヒャエル・エンデの遺品、作品、各国翻訳本の初版版、書齋にあった本のコレクションなどが展示されています。出版社と交わした書簡などもすべてそろっており、まだ未公開ですけれども、いずれ整理されましたら、これもまた、興味深い研究資料になると思います。

IJB を知らなくても『地球の歩き方』を手にする観光客が日本からよく訪ねて、ゲストブックに御自分のサインやコメントを記されます。もし、皆様もいつかお出でになられましたら、展示品以外にも是非ともこのゲストブックにお目を通してみてください。読み応えがあります！それほど日本ではエンデが人気を得ております。

## 14. ビネッテ・シュレーダー・キャビネット

絵本作家ビネッテ・シュレーダーも日本で人気があります。現在も活躍中ですが、このキャビネットはすべてシュレーダー夫妻が設計、デザインし、選び抜かれた職人さん、工芸家などによって作られました。空想の世界、遊び心にあふれたミュージアムです。このように幾つかミュージアムがありますが、ただ単に展示されているものをお見せするだけではなくて、特に子どもたちに対しては博物館教育や美術、文学教育などを受けたフリーの専任者たちが企画したワークショップを通してそれぞれの作家、画家、作品世界に親しんでもらうよう心掛けています。

## 15. ジェイムス・クリュスタ

写真の後方に見える塔が全部で四つある城の塔の一つで、リーディング・ミュージアムとしてのジェイムス・クリュスタです。クリュスタ（1926-1997）はドイツの代表的児童文学作家でドイツ児童文学賞、ハンス・クリスチャン・アンデルセン賞など多数受賞しており、ドイツの子どもたちは学校や家庭でみな1度は彼の本や詩を読んでいるはずで

す。遺品、作品などが寄贈された際、小さなお城には空いた空間がなく、中世の火薬塔だったこの塔に白羽の矢がたちました。ただ小窓が一つしかなく、あとは外壁だけの倉庫だったので、ミヒャエル・エンデ・ミュージアムの設計者がまた旨く問題を解決してくれて、塔の内部を灯台のそれに似せて鉄の螺旋階段を取り付けました。どうしてかと申しますと、クリュスタは北ドイツ、北海のヘルゴラント島に生まれ、灯台がやはり彼のライト・モチーフとなっておりますので、塔の中に彼の作品世界を感じさせる意味で、又、生まれ故郷のオマージュとして塔に決め、内部を改築しました。螺旋階段の合間合間に柵が設置され、展示品が置かれてあります。そしてここでも他のミュージアム同様、学校プログラムの専任担当者が、生徒たちに、あるいは午後の子ども室サービスの一環としてワークショップを提供、指導しています。展示品はひっそりと置かれているのですが、それを通して命が吹き込まれ、文学の世界、絵の世界、想像の世界を子どもたちが体験できるようになっております。

IJBの延べ面積は約3千平方メートルですが、修復時に手前に見える中庭を掘り起こし、書庫が造られました。

ここでIJBの歴史に入る前に、同地ミュンヘンで行われている、IJB以外の読書推進例を参考程度に御紹介いたします。

## 16. 第二部 ミュンヘンの読書推進活動

### 17. 第3回ミュンヘン児童書フェア（2009年）ミュンヘン市庁舎ギャラリー

バイエルン州の首都ミュンヘンはベルリン、ハンブルクに次いで、ドイツで3番目に大きな都市、人口は約135万人です。ヨーロッパで一番出版社数の多い都市と聞いております。毎年11月にミュンヘン市のカルチャーセンターでバイエルン・ドイツ書籍流通連盟（会員出版社、書店数1,300）が、ミュンヘン市と連携して大々的に一般市民対象の書籍展示会を開いております。作家朗読会をはじめ、さまざまなイベントが行われます。児童書も展示されます。児童書を紹介するイベントがあり、二人の児童文学評論家と一人の児童書店経営者が同センターの250席あるホールの壇上に並び、夕方6時から10時にかけて100冊を交代で紹介します。毎回前売券が売り切れるほど人気があり、私もほぼ毎年参加します。書店員、図書館員、先生、父母が多く、子どもの姿も見られます。説明が上手で長時間でも飽きさせないので、私は3人の本の魔法使いと心の内で呼んでいます。

このクリスマス前の書籍展示会とは別に、児童書のみが同じ2者の共催で3年前から毎年3月に市庁舎の中庭に面した市庁舎ギャラリーで大々的に行われるようになりました。これは市庁舎ギャラリーの入口です。

ちなみにドイツ書籍流通連盟は、出版社、書籍取次業者、代理店や書店を統合した、図書取引事業の利害を代表する団体で、フランクフルト、ライプツィヒ書籍見本市をはじめ書店員を育成する職業学校や専門学校、編集者や翻訳家対象のセミナーの運営もしております。

### 18. ギャラリーホール：内部

こちらが市庁舎ギャラリーのホールです。午前中は学校からのグループが、午後からは特に親子で、あるいはおじいちゃん、おばあちゃんと、あるいは友達同士で訪れ、楽しんでおります。

### 19. ギャラリーホール：三角屋根の読書コーナー

子どもたち用に三角屋根の形の本棚などがディスプレイされております。

### 20. ギャラリーホール：児童文学オーディオブックコーナー

ドイツは隣のフランス等と比較して、文学作品の朗読CD制作が盛んです。日本ではロングセラーの、神沢利子作『くまの子ウーフ』が2001年にドイツ語に翻訳出版されました。私はその

前の時点でドイツの出版社から鑑定を求められ、CD制作も勧めたので、どちらも出ました。おそらく日本児童文学作品のCD化に関してはこれがまだ唯一だと思われます。

## 21. ギャラリーホール：出版社カタログ 読書推進機関パンフレット

出版社の児童図書目録、新刊案内パンフレット、雑誌のビラ、図書館やその他、読書推進団体のパンフレットなどがずらりと並んでいます。これらは学校の教師や両親などには便利な情報源となります。

## 22. ギャラリーホール：日本の絵本 1

写真はみな今年の3月のものです。この棚にいわむらかずお作の『もりのあかちゃん』（至光社、1988年）の翻訳版が展覧されています。ドイツ語では *Hurra, der Frühling ist da!* (やあ、春だあ!) という題になっております。

## 23. ギャラリーホール：日本の絵本 2

ここには七尾純、久保秀一コンビの写真絵本「新・自然きらきら」シリーズの1点『にらめっこ』（偕成社、2002年）、*Wohin fliegst du, kleine Libelle* (ちっちゃなとんぼ、どこへいくの) が“こんな本もあるよ”というキャッチフレーズのコーナーに置かれてありました。日本の作品を目にするのはやはりとても嬉しいです。

日本の児童書のヨーロッパでの受容は、その反対の日本における海外作品の翻訳出版と比較しますと、はるかに下回り、現在もなかなかその状態は変わりません。

ところで先日、こちらの国際子ども図書館が来年の創立10周年記念にかけて「海外で出版された日本の児童書展」という催しをされる予定だと伺いました。これは素晴らしい企画だと思います。日本の読者が外国の児童文学を楽しまれるだけでなく、本国からはどのような作品が海外に翻訳出版されたかを知ることは、外国の出版社や読者の趣向、興味、強いては文化性の違いの発見などにも行きつけて、それがまた、本国の書物と改めて対峙してみるということにも繋がると思います。ゲーテが「他国に出て本国を知る」という有名な言葉を遺していますが、海外版を一堂のもとに見渡せば、外国に行かずとも、おのずと日本の児童書の特徴も見えてきて、一般人、子どもには大変興味のあるところだと思います。原本と翻訳本の装丁の違い、テキストの扱い方など、研究者にとっても、特に比較研究の分野からみても、尽きない魅力、テーマを提示、提供するのではないかと思います。出版編集者、翻訳者、作家、画家、代理店といった方々にも、改めて、外国にも移入された作品群を見ていただき、それがまた、日本の児童書の日本側からの積極的な海外進出への弾みとなることを願っております。

## 24. ミュンヘン児童書フェア関連行事 児童書店：関連行事

児童書フェアにも関連行事がつき、作家の朗読会やワークショップなどのほかに、子どもたちが出版社や書店を訪れ、現場の仕事を見たり、体験したりする企画もありました。それで私は市内の小さな児童書店に「大きな子ども」として参加させていただきました。今、子どもたちは棚に本がどのようなシステムで配置されているのか、あるいは個々の本に関して、書店員の持つべき知識などの教えを受けています。

## 25. ミュンヘン児童書フェア関連行事 児童書店：本入荷

この書店は御夫婦で経営してしまして、先ほどは御主人でしたけれども、こちらは奥さんです。今は注文した本が入荷したので、明細書と現品を子どもたちにチェックさせているところです。

## 26. ミュンヘン児童書フェア関連行事 児童書店：営業マン

そうしているうちにたまたま営業マンが訪れました。トローリーバッグにノートパソコンと見本の絵本を詰めて、やってまいりまして、今はちょうど注文を取りたい本の中身を見せて書店の経営者にいろいろと説明しているところです。子どもたちにとってまさしく生の職業体験となりました。

## 27. 第50回全国学校生徒児童文学朗読コンクール (2009年)

もう一つの読書推進活動を御紹介します。

ドイツでは、ドイツ書籍流通連盟主催、連邦大統領後援の全国選抜児童文学朗読大会が 1959 年から実施されています。大会結成にはエーリヒ・ケストナーも関わりました。今ここにミュンヘン市にある各学校から既に選抜された生徒たちが毎年の会場である IJB に集まっており、課題図書と自由図書を朗読します。審査員に児童が一人加わっています。ミュンヘン代表者が選抜され、それからさらに州大会へ、そしてドイツという最終の場で朗読を競い、この大会に加わった全国 70 万人の生徒のうち、勝利を得た生徒に大統領から、賞状が授与されます。本の虫たちにとっても魅力ある伝統行事です。

現代の読書環境はこれらの例にしても、昔と比べられないほど豊かです。本は多量に生産され、さまざまな形で読書推進運動、活動も行われます。今年の夏休みにミュンヘンの日本人学校の生徒、先生、親御さんなど、100 名ほどの方を、IJB に御案内しましたが、その時に、生徒さんたちに「本のない生活なんて考えられる？」と聞きましたら全員「ノー」と即答しました。幸せな時代、恵まれた環境の子どもたちです。下らない出版物にもあふれてはいますけれども、精神の糧となり、社会、強いては、世界の平和にもつながり得る本もたくさん存在しています。でも今、時をさかのぼり、第 2 次世界大戦とその前後を振り返りますと、本の存在、読書推進活動などが当たり前ではなく、ましては、自由に書物を読むことを禁止され、精神の糧、文化的なものに飢えていた時代があったという事実につづかれます。

## 28. 第三部 イェラ・レップマンとミュンヘン国際児童図書館

そしてここで、テーマを IJB に戻し、精神的にも物質的にも荒廃した、終戦直後のドイツ、ないしミュンヘンへと移り、混沌とした時代にミュンヘン国際児童図書館を築き上げたイェラ・レップマンの業績をお話します。

## 29. ミュンヘン市内 (1945 年)

ドイツの多くの都市は空襲で破壊されました。ミュンヘンも町の 50%以上が被害に遭いました。これは空爆で廃墟となった市の中心地です。やや右の後方は丸屋根の塔だけ残った、ミュンヘンのシンボル、聖母教会です。

立派な住居も地下への入口だけが残り残りました。でも雨や風をしのぐ仮のねぐらとなります。このような有様の家屋は市の至る所にありました。話を少しそらしますが、皆様は日本でも高く評価されているハンス・ペーター・リヒター作の『あのころはフリードリヒがいた』（上田真而子訳、岩波書店、1977 年初版）という本を御存じでしょうか。この記録写真を御覧になって、ふと、かの作品を思い出されたかもしれません。主人公の少年にユダヤ人の友達がいたのですが、空襲の際、大人たちから共に地下に避難することを拒否されて、外で爆撃に遭って死んでしまいます。戦争責任と良心、寛容の精神が問われている名作です。

至るところにあって、道路も見分けられなくなっていたがれきの山は 1951 年ぐらいまであったそうです。皆栄養失調で生存の危機にさらされ、1948 年にはミュンヘンの学生 1 万 5 千人が社会のため、自分のため、大々的な食料要求のデモ行進をしています。1949 年からドイツマルクが流通し、その後ドイツは徐々に経済復興の道をたどるのですが、反面、貨幣改革のため、特に多くの老人たちが生活の糧を失い、路頭に立ちました。このような戦後の困窮した時期に、子どものための図書館が誕生し、しかも創立者はユダヤ系ドイツ人の女性ということは、やはり驚くべきことだと思います。

## 30. イェラ・レップマン『子どもの本は世界の架け橋』

イェラ・レップマン (Jella Lepman 1891-1970) は 1891 年、ドイツのシュトゥットガルトにユダヤ人の工場主を父にして生まれました。第 1 次世界大戦後に 31 歳で戦争未亡人となり、ジャーナリストとなって働いていましたが、ヒトラー台頭後、ロンドンに亡命し、BBC 放送で働きました。ドイツが敗戦し、米軍による、米国占領地区の婦人と子どもの文化的教育的な面での民主的改善を図るための、いわゆる“Reeducation program”が実施されるときに、レップマンがアドバイザー役を依頼され、ドイツに戻る決心をします。ユダヤ人に対しては絶滅政策が施行され、ナチ体制に抵抗する人にも非人道的な犯罪が行われた、そんな国に戻り、その上、その国の再建に自ら携わるということは普通では考えられません。しかし、ドイツはレップマンにとっては祖国であり、そもそものドイツの文化には大いなる敬意を持っておりました。でも何よりも、子どもを大切に思う気持ち、子どもが自由な精神的発展を遂げられるよう、そしてその子どもた

ちが大人になってから、同じような惨事、戦争を繰り返さないようにと望みをかけて、青少年のための再教育に携わることになります。と申しても、すべてが最初から明確な形をとって現れ、順調に事が運ばれた、というわけではありませんでした。

レップマンは1964年、73歳のときに、国際児童図書館の成立に至るまでの経過と、当初の図書館活動、児童文学の位置付け、発展、促進のための世界規模の組織作り、そのための高名な政治家、文化人との交流などについて執筆し、その自伝的記録 *Die Kinderbuchbrücke* (児童書の橋) は同年ドイツで刊行されました。すでに英語、日本語、中国語に翻訳出版され、今年はいタリア語版が加わりました。

この回顧録には1945年、54歳のレップマンがアドバイザーとして米軍の軍服に身を包み、ロンドンから祖国へと向かう軍用機の機上の場面から始まります。自分が役目を受けたものの、実際に具体的な案は浮かばず、ドイツに戻ってから、まず黒人兵の運転するジープに乗って、戦禍で廃墟となったドイツの都市の視察から始めます。各地でさまざまな人、子どもと言葉を交わし、戦争直後のドイツの社会に何が根本的に欠乏し、或いは何が必要かを把握し、アドバイザーとしての課題を見つけます。それは国際児童図書館を立ち上げる事でした。そしてその展示会がやがて国際児童図書館設立の契機となり、設立後は図書館が創造的な空間となるよう、当時としてはかなり寛大な規則で子どもたちに本の利用を許し、教育的な熱心さで多彩な活動も実施しました。反面、図書館の経済上の問題は絶えずあり、存続の危機にも遭いましたが、館の存在意義を世にアピールすべく、巧みな文化政策と熱意で社会の有力な人物に共感と支援を求め、危機を乗り越えました。レップマン自身は無償で館長職を務めました。

想像、創造、どちらの力にも溢れ、行動力、政治的手腕にも長け、ユニークに自分の信念、課題を果たしたレップマンの自伝を読まれた日本の出版社、図書館関係の方々から読後の御感想をいただいたことがあります。個性と実行力で胸のすくような活躍をした人の記録に自分も勇気付けられた、というようなお言葉もありました。先駆的な図書館を築いた人の記録は示唆に富み、それがまた今日性をも持っているのだから、読み手も様々な点で心が燃やされるのではないのでしょうか。皆様もぜひともお読みになられますよう。

### 31. 第1回国際児童図書館展(1946年)ポスター

戦後の混乱期に児童図書館展を思い立つとは、まさしく意表をついたアイデアでした。本が欠けているドイツの人には精神的な糧も必要だと認識したからです。そして何よりも、ナチズムと戦争のなかに育った子どもたちには空想と公明な世界観が必要であるという見地に至り、本を通して子どもに寛容と民主主義の精神が養われ、他者への敬意と未知なもの、異質なものに対する興味を持ってもらおうと考えました。そこから世界平和に通じる「子どもの本を通して国際的な相互理解を」というモットーが生まれます。より良い世界を築くには大人ではなく、まず子どもや若い人から始めようと米軍司令官にその見解を明らかにし、その具体策として、展示会実施を提言しました。この案は合意を得たものの、実際にはそのための予算はなく、レップマンは1945年末から各国の出版社に献本依頼の手紙を出します。ナチスによって侵略、迫害を受けた国からは拒絶されても、ドイツの子どもには罪がなく、むしろ子どもはそのような国、民族について知識を得るべきだと再度の手紙で相手を説得しました。そうして展示会のために20カ国から約4千冊が集まり、終戦の翌年1946年7月にミュンヘンで第1回国際児童図書館展が実現します。その後はドイツの6都市に巡回展示され、どこでも子ども、大人を問わず、皆大行列を作って、会場に入り、感激しつつ本と出合いました。展示会では涙を流して喜ぶ人がおり、7カ所合計百万を越す人が訪れたそうです。この時のポスターには本を持つ平和の使者ともいえる少年が描かれ、子どもの本を通して国際理解を、という目的意識が感じられますが、同時に「本を与えてください、自由の翼を与えてください」というメッセージも込められています。その願いは実現され、ベルリンでの展示会が、アメリカのロックフェラー財団の目に留まったのがきっかけで、アメリカから図書館の視察と講演旅行に招待されます。前ルーズベルト大統領夫人も支援してくれ、帰国時には多数の本を得ることができました。それで合計約8千冊を基盤にして児童図書館設立へと展開します。ただ、まだがれきの山がいっぱいだったところに家も食料もなかった時代ですから、州や市の合意、認可、建物の確保などの課題が大きな壁となって立ちはだかっていた。でもそれを持ち前のユーモア精神と見事な才腕で打破し、1949年、開館へと至ります。この記念的なポスターは、今でも大事に所蔵されております。

### 32. IJB 旧館・カールバッハ通り (1949年 - 1983年)

前に申し上げた IJB の最初の建物です。前ヴィッテルスバッハ宮廷図書館、現バイエルン州立図書館の裏の、カールバッハ通りにあるお屋敷が国際児童図書館となりました。すぐ近くにミュンヘン大学があります。子どもたちは町の各所から、がれきの山や、ひどい様の道路をたどり歩いて図書館を訪れました。戦災を免れた建物は内容ともにオアシスでした。その感じがよくお分かりになると思います。その後、年々蔵書が増え、1983年に現在のブルーテンブルク城に移転し、現在この建物は学術系図書館の司書養成所として使われています。

### 33. IJB 子ども絵画教室

こちらが旧館時代の絵画教室です。イエラ・レップマンは単に図書館を作っただけではなく、子どもたちの文化的エリアにすべき、絵画教室や劇団、人形劇とかいろいろな活動の場を設けました。児童図書の場合は絵本が多いですから子どもたちに美的感覚や絵に対する鑑識眼を養わせようと意図しました。この日はお天気が良かったらしく、庭でみんなが絵を描いています。

### 34. エーリヒ・ケストナーと子どものラジオ番組

イエラ・レップマンは当時のたくさんの文化人と知り合いになりました。一番懇意にしていたのが、エーリヒ・ケストナーです。やはり思想的にも非常に通じる場所があったと思います。ケストナー著の寓話『動物会議』はレップマンの案なしには生まれませんでした。最近明白になったことですが、本当は「案」ではならず、「共著」という言いかたが正当です。でもその件は別として、ケストナーはレップマンの親友として、図書館の推進者として協力を惜まず、自作朗読や読書会、本の討論会や講演会をしたり、実験的演劇グループをつくったりと、おおいに活躍しました。当時のこの写真は館内で、子どもたちがケストナーにインタビューしたり、お互いに討論をしたりしているところをバイエルン放送局が新しく組み入れた子ども番組用に録音している時のものです。

### 35. エーリカ・マンとのラジオ番組

トーマス・マンの娘で俳優、作家として活躍していたエーリカ・マンも図書館を訪れました。中学、高校生といった年長からインタビューをされたり、共に本について話し合ったりと、それもやはりバイエルン放送子ども番組で放送されました。アストリッド・リンドグレーンとの日もありました。1940年代末、50年代はまだ児童書も少なく、情報にも欠けていましたから、このような画期的な作家インタビューや本紹介の子ども番組は子ども、大人を問わず、だれからも喜ばれました。

### 36. 児童文学公開ディスカッション ケストナーとカール・ツックマイヤーたち

レップマンはまた大人を対象に講演会を催し、時にはより多くの聴衆を求めて、館外で数日間にわたり、国際会議も催しました。ケストナーや、もう一人の同志的推進者であるユダヤ系の作家・劇作家カール・ツックマイヤー他、有名な哲学者や文学者などが講師として招かれ、子どもと教育について、児童文学と国際理解の関わりについて、或いはメルヒェンの残酷性や児童文学の問題についての講演や討論が行われました。1951年のことです。

### 37. IJB の青少年国際連合 UN フランス

民族間の理解を図り、12歳以上の子どもを対象に「青少年国際連合」が IJB に発足しました。子どもたちは競って自分が興味を持つ国の代表となり、定例総会には「自国」の国家体制や関心事を発表し、又、子どもなりに学校システムや子どもの権利などについても討論し合いました。この男子はフランス代表です。もちろん、皆そのためには図書館の本や雑誌、外部からの資料などを参考にした調べ学習をしてのことです。更に外国人も招待され、お国の子どもの日常生活について語ってもらいました。このように非常に進歩的な感覚で政治、社会問題に関わる実験的な青少年教育も試みられました。日本は原国連加盟国ではなかったせいも、残念ながら IJB 青少年 UN でも日本の名は記録には載っておりません。

### 38. インドからの訪問者

IJBには、エレノア・ルーズベルト、ホイス西独初代大統領、インド初代首相パンディット・ネルー、哲学者マルティン・ブーバー、オルテガ・イ・ガセット始め、同じく高名な出版人、作家、画家、図書館人、教育者たちが多数訪問されましたが、こちらはインドからの使節団です。

### 39. 国際子どもの自画像展 開会式（1952年）

子どもの空想性を高める絵画教育的観点からと、自我の成長に関わる心理学的な面の研究とを結びあわせ、1950年から国際児童自画像展の準備にとりかかりました。ミュンヘン大学の心理学教室やケストーも協力しました。世界57か国に子どもの自画像を求める手紙を研究所や学校などに送り、30か国から4千点の子どもの作品が集まりました。その中から300の作品が選ばれ、1952年に展示会が開かれました。この自画像展は世界中を巡回し、米国コロンビア大学からは研究目的のため、2度も要請されました。

ところでつい最近、こぐま社の編集部の方を通して、日本とレップマンとの関係において素晴らしい事実を知ることができました。

### 40. 平凡社児童百科事典・第12巻月報特集「自画像の世界」（1953年6月20日発行）

自画像展の作品応募の最初の呼びかけには日本からの反応はありませんでした。しかし、レップマンは1952年、バイエルン州立図書館を通じて、平凡社の存在と、同社が『児童百科事典』を刊行中なのを知り、編集部宛に改めて依頼状を出します。平凡社はそれに非常にきちんと応じてくれまして、全国の学校に運動し、2千点に近い作品が集まります。その内、200点が、何と勝見勝、国分一太郎、桑原実、滝口修造、吉川逸治氏など、14名のそうそうたる審査員の目を通して、ミュンヘンに送られてきました。翌53年にミュンヘンから自画像展の目録と論文の載っている冊子が平凡社に届きます。その中には当時9歳の石橋真一君の顔写真と絵も掲載されています。その冊子は児童百科事典の第12巻月報『ペリかん』の特集として翻訳出版されました。アメリカに次いで、2番目に作品点数が多かったとの報告も記されています。石橋君の作品と写真を御覧ください。

### 41. 国際児童図書評議会（IBBY）国際会議（1958年）

レップマンはまた、「子どもの本を通しての国際理解、相互理解」を目的に、又、児童文学の確固とした位置を据えるべく、1953年世界組織の国際児童図書評議会IBBYをチューリッヒで結成しました。設立の際の会員にはケストナー、アストリット・リンドグレーン、リザ・テツナー、ベッティーナ・ヒュールマンなどという、有名な作家や編集者なども名を連ねています。1958年の世界大会はフィレンツェで行われました。IBBYは子どものノーベル賞といわれ、大変権威ある国際アンデルセン賞の授賞団体としても有名です。

日本の支部JBBYは70年代につくられ、以降、子どもの本の質の向上、児童書を通しての国際交流をされています。

### 42. 石井桃子と佐野えんね

IJBは開館以来国際的にさまざまな人々との交流が盛んですが、日本からの最初の来訪者は故石井桃子さんでした。ロックフェラー財団の奨学金を得て、米国と欧州の出版事情、児童図書館の視察御旅行中、財団の勧めで1955年IJBにも1か月滞在されました。ちょうど『ノンちゃん雲に乗る』のドイツ語翻訳版が刊行される直前で、石井桃子さんはレップマンの自伝『Die Kinderbuchbrücke』（邦題『子どもの本は世界の架け橋』森本真実訳、こぐま社、2002年）の中でも登場します。

『ノンちゃん雲に乗る』のドイツ語版が出版された陰には、その作品を愛し、是非ドイツの子どもにも読んでもらいたい、という強い願いを持って、積極的に翻訳にとりかかった訳者、佐野＝ゲルバー・エンネ（Sano-Gerber Aenne）さんの力があります。1901年ケルン生まれのえんねさんはハノーヴァーで学ばれ、ベルリンの古書籍商会で働き、日本を知り、日本に親しみ、1933年、京都のドイツ文化研究所のドイツ語講師として来日されました。翌年、神戸商科大の佐野教授と御結婚され、幸せな家庭を築かれましたが、1995年長寿を全うされるまで、日独交流にも力を注がれました。大学のドイツ語講師、文学教授として活躍され、岐阜の村では農耕をしつつ、地元の人々に語学やドイツ料理を教え、草の根の国際交流をされました。社会教育のた

めの講演も数え切れないほどされたそうです。えんねさんは日本文化を深く愛され、茶道に励み、生涯和服で通し、真摯に日本人としての生活を送られました。ベルリンにベルリン日独センターという学術系国際交流機関があり、2008年から9年にかけてえんねさんの功績を紹介した展示会が開かれ、カタログも発行されました。

そういう方が『ノンちゃん雲に乗る』を訳されたわけですが、著述もされており、日本で出版された『日本に住むと日本の暮らし』（樹心社、1988年）の中にはドイツの出版編集者との体験談が書かれています。文化的な違いのズレがもたらす原作ないし訳者と、編集者側の意見の対立です。日本を深く理解されたえんねさんにとって、どうしても変えてもらいたくない箇所があって、編集者とのやり取りに大分苦勞をされたようです。今後の石井桃子研究にも価値のある資料かと思えます。本日はこの会に御息女の川端春枝さんが御来席されていますが、川端さんも御母堂えんねさんの思い出話を出版されておられます。

#### 43. 第四部 IJB の活動

レップマンは1957年に引退し、2代目の館長はヴァルター・シェリフとなりました。

ミュンヘン大学が近かったので、学生や先生、また内外の研究者もよく訪れるようになり、次第に研究資料も増え、子ども図書館から、児童文学専門図書館へと発展していきます。ドイツ文学者の故高橋健二さんもよく来られたそうです。

#### 44. 第40回国際児童図書展 バイエルン州立図書館（1989年）

1982年には120言語に及ぶ約38万冊の蔵書数を数え、旧館では動きがとれなくなり、翌年、現在の場所に移転しました。私は1989年に職員となりましたので、その年の秋に早速、バイエルン州立図書館のホールで催された「定例国際児童図書展」で日本と韓国の児童書を紹介しました。この年は第40回目にあたり、過去1年間にIJBに送られてきた1万9千冊の新・近刊書の中から、48か国、2千5百冊が、言語部門スタッフにより、選書され、解題付き図書目録を付けて展示されました。開会式で3代目の館長アンドレアス・ボーデがあいさつしました。白いブラウスを着た副館長のリオバ・ベッテンが後ろに控えています。出版社の方々や、新刊を探す翻訳者なども出席されています。この行事は私たち館員にとっても、諸国の本の出版状況や、テーマなどが一度にうかがえて、かついろいろ比較できて、大変勉強になる催物でもありましたが、残念ながらその後、廃止されました。

#### 45. 第40回国際児童図書展 日本と韓国のスタンド

ここは東アジア部門のスタンドです。開会式には言語部門スタッフが、集まった人に、自分の担当する国の児童書の傾向や特別な作品などを紹介して、皆、一緒に会場を回りました。

#### 46. ポローニャ国際児童図書見本市 IJB ブース（2008年）

この伝統的な展示会がなくなったとは言え、同じ趣旨で、毎年、ポローニャの国際ブックフェアに参加し、IJB ブースにて各国の推薦児童図書を展示紹介しています。同時に出版社、図書館、読書推進機関、児童文学専門家との交流、巡回展示会に関する相談など行っております。

#### 47. 国際推薦児童図書目録「白いカラス」英語版

出版社から過去1年に送られて来た児童書から、毎年約30か国250タイトルが選書され、解題付き英文図書目録 *The White Ravens* が作成されます。国際的に普及しており、内容はIJBとInternational Children's Library (ICDL) のウェブサイトでもご覧になれます。

まだドイツ語圏オリジナル作品ですが、ミュンヘンの中学校の国語の先生が文学教材として利用し、この目録で紹介されている作品と解題を生徒に読ませ、目録の解題と生徒の感想を比較させるプロジェクトが試みられています。読書能力と鑑識眼、批評力をつけること、自己の主張、そのための表現力の練磨などをねらいとしています。

#### 48. ポローニャ国際児童図書見本市 IJB ブース 奨学生・客員研究者・五味太郎

IJBの奨学金制度を通して来られた方々は、ポローニャのブックフェアに館員とともに参加でき、IJBのブースで多少のお手伝いをしてはいただくもの、国際的な研修ができます。向かって左からは、その制度で来られたモンゴルの女性翻訳者フーランさん、お隣は講談社の編集者・吉

田さんと森定さんです。同社の特別研修制度により IJB で御研究されました。IJB では目下、森定さんの御尽力により、館が依頼した「日本のマンガ展」を開催中です。

そのお隣が横田順子教授、National-Louis University の教授でいらっしゃいます。Center for Teaching through Children's Books の所長もされておられ、主に司書と教師に児童書をアプローチして教育をされていらっしゃいます。今日はお見えになっています。

そのお隣の、眼鏡をかけていらっしゃる方、どなたかはお分かりだと思いますが、かの五味太郎さんです。「架空の図書館」という、IJB の企画展示会のために、ブースを訪れました。IJB は 2007 年に 30 か国 72 人の、現在御活躍中の絵本作家に、まだ存在していない絵本の表紙絵を作成していただきました。日本からは五味太郎さんの他に、荒井良二さん、斉藤隆夫さん、酒井駒子さん、出久根育さん、谷内こうたさんがこのプロジェクトに参加してくださいました。これは非常に想像力をかきたてる構成で、画家の方々には絵本の内容を数行暗示的に書いていただくだけで、あとは表紙絵を鑑賞する側が話の続きを考える、或いは完成させるという形で、おおいに想像力がかきたてられる展示会でした。国外に巡回されましたが、日本では、「架空の絵本展」というタイトルで東京と安曇野のちひろ美術館で展示されました。日本語版のカタログも作成していただきました。

さて、日本の児童文学の存在を国際的により知ってもらうべく、初期に私の試みたことの中に、1989 年、アウグスブルク市学校局での「日本の知識の絵本展」や、自治体運営の国民大学での「日本の絵本のドイツ語翻訳版展」などがあり、1990 年、フランクフルトのブックフェアが日本年だったときには、日本の出版物が特別プレゼンテーションされた同ホールに、IJB 収蔵の児童書、研究書、専門誌など、総括的に展示紹介できる特権を得て、アピールしました。また、同期間中、フランクフルト市立中央児童図書館では日本の児童書のドイツにおける受容の現状と、日本におけるドイツ児童文学翻訳の隆盛について講演しました。残念ながら日独、日欧、やや一方通行の間があります。

#### 49. 日本の絵本芸術展 (1993 年)

IJB と日本との関係において、1993 年にはとりわけ記念すべき大展示会が、それを企画された日本国際児童図書評議会 (JBBY) との共催で実施されました。「日本の絵本芸術展」

(Japanische Bilderbuchkunst) です。JBBY は体系だった構成をし、大変高価な展示品が送られてきました。保険金額から察して、多分これまで IJB が行った展示会の中で最高に価値の高いものだったと思われます。ミュンヘンでのポスター制作には瀬川康男作「おおさむこさむ わらべうた」(福音館書店、1977 年)の中から「しょうがつじい」の絵をモチーフに選びました。日本の絵本前史として、平安時代の絵巻から出発し、奈良絵本、丹録本、江戸時代の草双紙、一枚絵などと、およそ、普段目にするのできない文化財が展示され、それと結び付けて、日本の伝統的芸術や日本人の美意識、感性が表れている現代の多様な絵本作品、それに赤羽末吉と瀬川康男の原画も含めて、子どもの本の流れを知ってもらいました。ただ、奈良絵本は日本から送られて来なかったのも、ドイツで私が探し、ドイツの学術系図書館や日本学科のある大学になら絵本があることがわかったのですけれども、高価なために貸してもらえず、最終的にはフランクフルト工芸美術館から借り受けることができました。それには美術館に出向き、直接交渉して許可を得て、そのうえ先方が特別に運んで来たという、非常に注意を払ってお借りした展示品です。

でもそのお陰で今日に至るまでの絵本の歴史と絵画的特長がほぼ通観できる展示会となりました。又、現代の絵本作品例には、IJB の蔵書を多数追加しました。

展示会会場に入る前のホールの壁には日本の児童書出版社からの、美しい児童書ポスターが飾られています。右手のガラスケースには 1992 年に美智子皇后様が英訳された、まど・みちお詩集の翻訳絵本が特別展示されています。

#### 50. 日本の絵本芸術展 会場

展示会場の眺めです。このホールは創立者の名をとり、イエラ・レップマン・ホールと言いまして一番大きなホールです。

#### 51. 日本の絵本芸術展 絵巻

展示会場に入り、これが絵巻です。

## 52. 日本の絵本芸術展 奈良絵本 丹緑本

フランクフルト工芸美術館からお借りした奈良絵本が上の棚に並べられています。下が絵本史上、その後に登場する丹緑本です

## 53. 日本の絵本芸術展 草冊子 おもちゃ絵

次が江戸時代の子どもの本、草双紙で、別の場所に他の沢山の例が置かれてあります。婦女のための絵入り啓蒙書、教訓書なども展示されています。

## 54. 日本の絵本芸術展 北斎源氏歌留多

北斎の源氏歌留多です。一枚絵、いわゆるおもちゃ絵も別の場所で展示されました。

## 55. 日本の絵本芸術展 現代の絵本

多数出展された現代の絵本のほんの一部です。来館者は日本語が読めないのに、ドイツ語、英語、フランス語などの海外版があればと思い、原書と並べました。現代絵本はすべて手にとって観賞したり、読んだりできます。来館者が扱いやすいように、絵本と絵本を仕切る木枠を特別に作りしました。

## 56. 日本の絵本芸術展 学校プログラム

IJBは今では、各種展示会、その他の催しにちなんで「学校プログラム」を提供し、盛況ですが、その始まりは、この「日本の絵本芸術展」でした。現在のようにフリーの専任担当者もいなかったのので、私自身が企画し、外部から協力者を探し、依頼するオルガニゼーションもしました。

1か月半の展示期間中の平日午前中は毎日、学校生徒がクラス単位で訪れました。展示会の案内を毎回受け持つことができないので、午後から開く貸出室の同僚に内容を説明し、チームワークでこなしました。

この機会にできるだけ多くの人に日本の文化、伝統をアプローチしようと、国際交流基金の窓口でもある、ケルンの日本文化会館と、バイエルン独日協会、プロフェッショナルに活動するミュンヘン折り紙の会に支援していただき、数多くの関連行事を設けました。皆ボランティア活動です。

この日はインターナショナルスクールの生徒が学校プログラムに申し込み、展示会見学の後、ワークショップに移りました。今、IJB 子ども絵画教室の先生が、赤羽末吉画、矢川澄子再話の『つるにようぼう』（福音館書店、1979年）の絵本を手にしつつ、その原画の前で説明をしています。

## 57. 日本の絵本芸術展 学校プログラム 絵巻ワークショップ（子ども絵画アトリエ）

アトリエでは和紙と墨が用意され、絵巻が作られました。日本の絵画の独特な表現形態を子どもたちが自ら体験します。このワークショップで創作された作品群は後に IJB で公開展示されましたが、その中から、私は素晴らしいものを発見しました。それは画面に絵柄のように美しくちりばめられた漢字です。この日の展示会案内はちょうど私が受け持ったのですが、その前に歴史的な子どもの本にみられる日本の文字の美しさにも触れ、絵だけでなく、字もよく観賞するよう促しました。また、家からはかつて自分の子が使った小学校の書道の教科書を持ってきて、日本の子どもたちの習字について話しました。その時の教科書に見られた漢字を目だけで捉え、絵巻作品に取り入れたわけです。子どもの中に潜む創造力のたくましさ、豊かさを、身をもって学びました。

また、或るギムナジウムの先生が、ギムナジウムとは日本でいえば中学と高校を合わせたような進学コースの学校ですが、英語版『つるにようぼう』を参考にして、生徒と演劇的試みをしました。残念ながら私はそれを見ておりません。

アトリエでのワークショップの他に、年長のクラスには文化短編映画、「日本の手漉き紙」「絵巻」「マンガ」などをケルンの日本文化会館からお借りして見せました。年少クラスには日本の伝承文学へのアプローチとして、民話紙芝居や民話をモチーフとした折り紙実習などを提供しました。

## 58. 日本の絵本芸術展 ファミリープログラム 書道 習字教室

学校プログラム以外には週末はファミリーを対象にいくつかのワークショップを組みました。そのうちの一つ、絵画アトリエでの書道教室です。ミュンヘン大学日本学科の語学の講師の方が指導してくださいました。

## 59. 日本の絵本芸術展 ファミリープログラム 折り紙（貸出室）

貸出室での民話折り紙教室です。ブラジル系ドイツ人のグラフィックデザイナーが会長の折り紙協会の協力です。ドイツ博物館で折り紙飛行機コンクールなども催し、プロフェッショナルに活躍されている会長自ら、指導されています。白いワイシャツ姿が会長です。

このように展示会期間中、多彩な関連行事をもって「日本の絵本芸術展」は催されましたが、その間にまた大変名誉なことがありました。

## 60. 皇后様御来館（1993年）

それは9月の天皇皇后両陛下がドイツを御訪問中に、ミュンヘンでは、天皇陛下はバイエルン学術院に行かれ、児童文学を愛好される美智子皇后様はミュンヘン国際児童図書館に御来館されたことです。「日本の絵本芸術展」はJBBY代表、かつ準備のために来られていた松居直さんが展示会を御案内してくださいました。板東悠美子さんもいらしていたのですが、その日はすでにご帰国されていました。その後、シャリオット4代目館長の案内で書庫の古書を御覧になり、最後に私の提案が実現し、現在活躍中のドイツ児童文学作家と画家の方々とお会いになりました。

## 61. いわむらかずお（貸出室）

さて、同じ90年代初めに、日本からIJBに来られた方々を御紹介しますと、いわむらかずおさん御夫妻。「14ひき」のねずみシリーズのドイツ語版は当時の貸出室の同僚に言わせれば、人気ナンバーワンだったそうです。

## 62. ピーターラビットの会&旧東独の児童書

またピーターラビットの会の皆さんもいらっしゃいました。小ホールで、旧東独の児童書を御覧になっています。イデオロギーに染まった作品を除いては、優れた本が多数あり、ブックデザイン、イラストレーションは愛情が込められ、非常に魅力的です。国の出版社ですから贅沢に作られています。紙質が悪くても、それがまた本の好きな人には独特の味と感じられます。この時はついでに、南ドイツ新聞の児童書書評欄を紹介しました。日本でもそのように有名新聞が1ページ全面で本格的に児童書を扱ってほしいと、常々私は願っておりましたので、その下心があったの紹介でした。成果はまだないですけれど。

別の年にはJBBYの会員の大グループがボローニャのブックフェアの後、お寄りになり、その時はIJBの言語スタッフたちとの懇談会を組み、又、当時IJB子ども読書クラブを主宰していた図書目録作成部門の同僚にレクチャーをしてもらいました。ちなみにドイツで最も権威があると言われている、ドイツ児童文学賞には青少年審査員グループが与える青少年賞部門がありますが、これはそもそも、その同僚のイニシアティブからなるものです。余談ですが、彼は現在の勤め先の地方都市の市立図書館であらたに子ども読書クラブをつくり、市立図書館主催の青少年児童文学賞を今年設置しました。子ども読者は主張し、かつ子ども自身が成す読書推進にもつながります。賞金は地元の市が担います。

IJBにはこれまで日本からたくさんの児童文学関係者が訪問されました。その方々との交流について、それぞれお話する時間がないので、それに代わって2、3の日本に関係する展示を御紹介します。

## 63. 布の絵本さわる絵本展（2000年）

70年代に偕成社故今村廣氏のイニシアティブで「布の絵本さわる絵本展」が催されましたが、それらの展示品が保存されていて、時々障害者教育に携わる人が見に来ます。2000年に東京布の絵本連絡会より新しい作品が何点か寄贈されましたので、それを機に、布の絵本の作り方などの児童書を含めて、改めて玄関ロビーに展示しました。布の絵本を初めて見た人は皆興味を持ちます。今もちょうど私が東京に着いたときに、ドイツの学生さんから、布の絵本の理論的な資料はあるかと、メールでレファレンスを求められました。卒論のためだそうです。

#### 64. 石井桃子展 - 95 歳をお祝いして (2002 年)

今は亡き石井桃子さん、95 歳になられた時に遠い地のミュンヘンでもお祝いさせていただくと、研究図書室にて、石井桃子展をいたしました。折しも、石井桃子さんは国際アンデルセン賞の候補者となりましたので、よい機会であり、日本では大家であっても、外国では知られていない業績を紹介しました。このガラスケースとは別のケースにもいろいろ資料が展示されましたが、東京子ども図書館と杉並区立中央図書館からお借りした資料や、JBBY がアンデルセン賞推薦のために作成された英文紹介文書も利用し、お陰で慎ましくも密度の高い展示になりました。ケースの中央の雛人形は 50 年代に石井桃子さんが IJB に送られた記念すべきものです。

#### 65. ハインリッヒ・ホフマン「もじゃもじゃペーター各国版」展 (2009 年) : 紙芝居

IJB では国別の展示会のほかに、常に様々なテーマ別の展示もします。国際的に資料を収集していますので、テーマにかない、注目すべき作品はいろいろな国、言語のものが展示されます。今年はいしつけの絵本で、ドイツの家庭では誰でも知っている、『*Struwel Peter* 『もじゃもじゃペーター』の作者、ハインリッヒ・ホフマンの生誕 200 年にあたりますので、原書、翻訳版、珍しい世界の再話や類話などが書庫から出されました。日本の紙芝居『なかまはずれのペータ』(多田ヒロシ作・画、童心社、1966) は世界で唯一のメディアです。展示の場は研究図書室です。国際子ども図書館ではドイツに先駆けて、『もじゃもじゃペーター』やそのパロディなど、いろいろ展示されていたと思いますので皆様も御存じでしょう。

#### 66. 「キツネとうさぎがこんばんはと…」画家ワークショップ (2008 年) ラインハルト・ミヒル

IJB では館長以下、各言語部門が共同で企画し、実行するテーマ別企画展の他に、作家、画家の作品展を催しますが、開会式にはよくその御本人に来ていただき、直接本の作り手とのコミュニケーションを図ります。日本では『みなしごギツネ』(イリーナ・コルシュノフ作、ラインハルト・ミヒル絵、遠山明子訳、福武書店、1988 年)などで知られている、画家ラインハルト・ミヒルの展示会には、例えば、大人を対象にした夜の開会式では、出版元の社長や編集者もスピーチをし、隠された裏話やエピソードを披露して会を楽しくしてくれました。昼間は中庭でミヒルと生徒の出会いのワークショップがありました。

#### 67. ナイフ、フォーク、ハサミ、光 - ヴォルフ・エアルブルッフ

やはり大人を対象にした開会式のひとときです。コラージュを用いて、知的で独特な雰囲気のある絵本で日本でも知られている芸術家かつ大学教授、ヴォルフ・エアルブルッフの作品展です。児童文学評論家の講演の後で、エアルブルッフ自身がスケッチをしつつ、新しい話を生み出しています。スケッチはこの後、会場で競りにかけられ、図書館の金庫を潤しました。このような夜の行事には児童文学研究者、イラストレーターやイラストレーター志望の学生さん、出版関係者が参加され、児童文学という専門分野での社交の場になります。

#### 68. ロビンソン・クルーソー展 ファミリープログラム (2008 年)

一般の、それもファミリーを対象にした開会式は往々にして、季節のよい週末に実施され、中庭がフルに活用されます。ロビンソン・クルーソーとロビンソナーデの各国版展示会には、島で生きたロビンソンの追体験を子どもたちが楽しみました。自然の材料を集め、皆で掘って小屋を建てたり、食器や道具を作ったりし、生きる力と創造力を大いに発揮してもらいました。

#### 69. ロビンソン・クルーソー展 学校プログラム ワークショップ

展示期間中の平日午前中は、会場で本の読み聞かせがあり、その後、アトリエに移り、各自の自由なイメージで、ロビンソンものを創作したり、絵画表現に挑んだりなど、学校プログラム専任者が企画したワークショップを、課外授業の一環として生徒たちがいろいろ試みました。この時も自然生活を余儀なくされた主人公の立場に合わせ、絵を描くにしても全員、鳥の羽根を使用しております。

## 70. エリック・カールのカラフルな紙、魔法、動物園展（2009年）：研究図書室

今年是世界中の子どもが知っている『はらぺこあおむし』の作者、エリック・カールが80歳を迎えられたので、それを記念して回廊ギャラリーと研究図書室で展示会が行われました。ポピュラーな画家にふさわしく、アメリカからはグッズも展示品として届きました。日本での受容ぶりは数多くの翻訳版やレポレロ型の布の絵本『はらぺこあおむし』が示しています。

## 71. エリック・カールのカラフルな紙、魔法、動物園展：ファミリーフェスティバル：変身

日曜日のファミリーフェスティバルでは、子どもたちが青虫になってちょうちょうに変身する遊びなども行われました。

## 72. エリック・カールのカラフルな紙、魔法、動物園展：ファミリーフェスティバル：工作

フェイス・ペインティングや青虫、ちょうちょうなどの工作を家族ぐるみで楽しめる企画もいたしました。児童文学作品、あるいは絵本そのものを素材にして、子どもたちの日常生活に楽しみや喜びを与えることができるのは、本の価値を伝える大人側の喜びでもあります。

## 73. 平和と寛容をテーマにした巡回展示図書目録：カタログ3種

夢を育み、想像の世界を拓き、世界や人生に関する知識や叡智が得られる本の世界の豊かさ、そこにはまた、国と国、民族と民族における平和共存を願ったメッセージ性を持つ作品も見出せます。IJBはレップマンの理念を継承して、政治、社会、文化、宗教の相違から生ずる問題を扱った本を集め、巡回展示会を行っています。1991年以降から「戦争と平和」、「平和・自由・寛容—反戦の本展」、「児童書のなかの子ども的人権」があり、その後この3種が続きます。子ども大人を問わず、多くの人に読んでもらいたい作品群です。

### 「ハロー・ディア・エネミー」1998年、2006年

「ハロー・ディア・エネミー！—平和と寛容の国際絵本展」は1998年に実施し、19か国、41点の本が紹介され、2006年には増補本も加えて80点が紹介されました。直接、戦争の残酷さをリアルに語っている作品を除いて—それは大体日本の本が代表していますけれども—ほとんどが国家間の戦争や民族抗争を生み出す危険な状況や要因が、あるいは日常のレベルで、子ども同士の不和、争いの原因となる要素がモチーフになっており、動物が擬人化されている寓話も多く含まれています。子どもであっても、争うことの原因が自分の中にも潜んでいるということに気づき、又、どうしたら人間の大切な未来をよい方向に向けていくことができるか、子ども読者自身も、自分で考えられるようになるための助けとなるものが、絵本作家たちによって、力強く、色彩豊かに表現されています。

この展示会は様々な国を巡り、100以上の土地に達し、最も成功した巡回展示会ですが、その半分以上は、2002年、東京都立日比谷図書館を皮切りに日本全国を周った日本が占めています。受け入れ先では自主的にプロジェクトも組み込まれました。日本語版の目録をも翻訳作成された、JBBYの献身的な普及・啓蒙運動に拠るものです。2006年にIJBで増補改訂版目録が刊行されたのをきっかけに、改めて第2弾がJBBYと紙芝居文化の会を通して、現在日本の各地を巡っています。

巡回展示会ではありませんが、テーマ上、ここで是非とも付け加えたいのは、IJBが戦争に関わる歴史教育の一環ともいえるべき試みを2年前から始めたことです。ミュンヘンからそう遠くないダッハウ市に、ナチの強制収容所跡が残されており、学校生徒たちも大勢見学に行きます。この収容所には、ナチスのイデオロギーに迎合しなかったドイツの知識人や聖職者たちが多数捕らえられていました。ダッハウ強制収容所記念館とIJBと学校が連携し、生徒たちが収容所を見学した後、そのまま学校に戻らず、レップマンによって創立されたIJBに向かい、静かな環境の中で、自分が見聞したこと、感じたことや思いを綴るといふ、作文教育も兼ねたプロジェクトです。IJBでの指導はユダヤ人迫害などをテーマにした児童書を手がけた経験のある編集者が担っております。そうしたプロジェクトの体験を通して、いずれ社会の成員となる青少年たちに過去の歴史的事実と将来自分たちが継ぐ問題が意識化されます。同時に、将来起こり得る戦争・政治的犯罪行為の防止にもつながります。

ナチズムとその時代を生み出したドイツでは、戦後になってその犯罪行為をどのように扱うかが論争的となりました。そのキーワードは„Vergangenheitsbewältigung“「過去の克服」と言

い、ドイツ人は日常でもよくこの言葉を使います。戦後西ドイツのテオドール・ホイス初代大統領がこの言葉を広めたと言われていますが、その意味は過去の政治的犯罪行為を明らかにして、それに対して様々な措置をとることを可能とする、民主化への動き、ないし概念を指します。刑法や賠償・補償問題以外に、歴史教育にも関わり、文学や映画のジャンルでもテーマとして常に扱われています。優れた児童文学作品もあります。先ほどの『あなごころはフリードリヒがいた』もこのジャンルに入ります。

かつて、ヴァイツゼッカー前大統領は演説の中で「過去に目を閉ざす者は、結局現在にも目を閉ざす」と述べました。

### **異文化圏の子どもたち 2002年**

「異文化圏の子どもたち」は絵本からヤングアダルト書に至る12か国60タイトルで成り立つ、インターカルチュラルなコミュニケーションを狙った巡回展示会です。世界でグローバル化やボーダレス化が進むと、多くの国で他文化社会も形成されますが、同時に異文化に対する、あるいは、外国人に対する偏見や嫌悪から摩擦が生じ、人種差別、抑圧、疎外などの問題ももたらします。時にはパラレル社会も生み出します。このような社会、文化の狭間で生きる子ども、又は子ども時代を送った人たちが主人公となった物語が多く集められています。この展示会はドイツ連邦ファミリー省からも奨励され、大臣次官が序文を寄せています。北アフリカ、近東、イランやアフガニスタンでも展示されました。

### **楽園への展望 2008年**

イスラム教とヨーロッパのキリスト教世界との出会い、より具体的に言えば、イスラムの伝統と、ヨーロッパの自由主義的な思考と生活様式のぶつかり合い、そこから生じる問題に光をあてたのが「楽園への展望」です。異文化圏からの移民家族の子どもや次世代の自伝的小説や、外国人移民ではないけれども、共感と理解を持って、その人たちの立場から物語る、といった作品、それに、イスラムの世界を理解させるために出版された知識の本などから成っています。ミュンヘン市文化局より特別プロジェクトの助成金を得て、2008年、作家朗読会、学校プログラムなどの関連行事を伴って実施されました。

ヨーロッパには経済的事情から祖国を去り、ドイツにも移住した人々が多勢います。単身で移住しても、その後家族を呼び寄せることが、受け入れ国から許されています。例えば、ドイツの大都市では、70%がそうした移民の子でうまっている、公共の小学校、中学校の学級が今では稀でなくなりました。移民の子の生活水準、教育環境はもともと祖国においても高くはなかったもので、新しい土地でのインテグレーションも難儀を伴い、中には子どもが、そもそも優秀であっても、そのポテンシャルな力はなかなか発揮できません。それにまず言葉の問題からして、移住地での学校生活もうまく融合しにくく、学校教師、ドイツ人生徒、移民の生徒の間で問題が生じがちです。毎日机を並べて勉強していても、時には不和、誤解、差別、暴力なども起こりがちです。特に移民の人は大人も子どもも祖国とは違った社会共同体に生活しているので、それに融合できないと、結局、最終的には彼らの信じる宗教に拠り所を求めることにもなります。時にはそれが過激に走るときもありますが、異文化の社会環境において、自分自身のアイデンティティー、個人性が問われることになります。

でも融合という言葉は、相手に自分を合わせるとか、我慢して成り立つのではなく、お互いを良く知り、その上でお互いを認め合って、つまり寛容の精神を持って、同等に共存することではないでしょうか。ここでまた、「相互理解と寛容」の大切さが謳われることになります。文学はその価値と、また、実際に可能性も伝えることのできる貴重なメディアだと云えます。そうした建設的な意味で、このプロジェクトは厳選された57タイトルの中の同タイトルを引用して「楽園への展望」と名付けられました。「相互理解と寛容」は世界の平和のための図書館に見られる共通の理念です。

展示自体は本館ロビーのガラスケースに並べただけの大変慎ましいものですが、解題付きの目録には作家たちのプロフィールと、作品を基にして、学校の先生が授業やグループ活動で実践し易いよう、学校プログラム専任者によって、ワークショップ例が紹介されています。また、実際に教師対象の研修会も企画されました。

#### 74. アズーズ・ベガグ自作朗読パフォーマンス（2008年）中学・高校生対象（14-17才）

政治的、社会的要素をもつ児童書、ヤングアダルト書の類は、見た目も地味な作りですが、作家朗読会に招待されたアルジェリア系フランス人のアズーズ・ベガグ（Azouz Begag）は自分の作品世界を大変ユニークにプレゼンテーションし、各地の学校から集まった、中学、高校生の心をすっきり捉えました。

#### 75. アズーズ・ベガグ自作朗読パフォーマンス 中学・高校生対象（14-17才）別クラス

アズーズ・ベガグは両親が旧フランス植民地のアルジェリアからの移住者だったので、リヨンの近くの移民用バラック地区で生まれ、子ども時代もそこで過ごしましたが、貧困と差別にめげず、立派に成人し、経済と社会学者となり、作家としても有名になりました。児童書の代表作は *Le gone du Chaâba*、ドイツ語版のタイトルでは「町はずれに住む少年」で、ドイツの学校でもドイツ語翻訳版は国語の授業に、原文はフランス語授業の教材として良く利用されています。日本では未訳と見受けられます。彼はフランスでアルジェリア系の若者たちが暴動を起こした時期に、2005年から2007年まで政府から特別に「機会均等促進大臣」に任命され、移民系の青少年問題に関わる政策に取り組むことになりましたが、現サルコジ大統領と亀裂が生じ、退官しました。現在はインターカルチュラルな自由人として、偏見と差別と疎外に抗議し、よりよい多文化社会の実現を願って国内外で講演旅行をしています。

#### 76. アズーズ・ベガグ 自作朗読パフォーマンスのタペ：舞台の Begag に聞き入る大人たち 1

午前中はフランス語の授業をとっている生徒対象の学校プログラムがあり、夕方からは大人向けに本館玄関口の中庭でオリジナルとドイツ語翻訳版からの一部朗読、作家の苦渋にみちた人生についての話や、ディスカッションなどが行われました。

#### 77. アズーズ・ベガグ 自作朗読パフォーマンスのタペ：舞台の Begag に聞き入る大人たち 2

ベガグの本に描かれた移民の実状や彼自身の体験、社会批判、メッセージは舞台の役者としても活躍する著者自らによって、ユーモアと風刺を交えたパフォーマンスで、聴衆の共感を得ました。

#### 78. 展示会「楽園への展望」（2008年）学校プログラム ワークショップ：コミック イスラム

貸出室でテーマに適ったコミック作品などを参考にし、生徒たちがそれぞれイスラム教とキリスト教の違いなどについて調べ、コミック作品に仕上げたワークショップもありました。この絵はモスクと教会のシンボルの相違などが描かれています。別の学校プログラムでは、アムステルダムが舞台の児童書を取り上げ、少年たちの暴力行為のシーンを読ませ、感情移入をさせたうえで、登場人物の背景、状況の分析やディスカッションへと誘導しました。

#### 79. エーリヒ・ケストナー文学賞授賞式（2009年）

IJBは時には児童文学関係の授賞式の会場ともなります。

今年はエーリヒ・ケストナー文学賞にアンドレアス・シュタインハーフェルの児童文学作品『リーコとオスカーととっても深い影』が選ばれました。これはもう日本でも出ていますけれども（森川弘子訳、岩波書店、2009年）。先日のフランクフルトブックフェアではドイツ児童文学賞も獲得しています。IJBの授賞式当日の午後は子ども対象の自作朗読会があり、第2巻目が書店発売日に先駆けて特別紹介され、子どもたちに大喜びされました。夜、大人が集まるイベントにもプログラムが組まれ、まず、エーリヒ・ケストナー協会の会長、ライプツィヒ大学ドイツ文学研究所所長のベルンハルト・マイヤー教授が本館ロビーで記念講演されました。教授は子ども向けのケストナーの伝記を今年出版されてもおられます。その後、大ホールにて授賞式が行われ、ハーフェルについて、編集者と批評家がそれぞれスピーチをし、さらにケストナーの自伝が楽団演奏付きで俳優によって朗読され、最後は参加者たちの文学サロンのような自由な語りあいの時間となりました。ちなみにこういった楽しい会のスポンサーは版元である出版社でした。

## 80. 第五部 2009年 IJB 開館 60周年を迎えて

### 81. 2009年 IJB 開館 60周年を迎えて：風船と子どもたち

IJBは創立時から今日に至るまで、世界の子どもたちが母国語で本が読める児童図書館です。子どもたちが本を通して未知の世界を知り、知識を高め、空想の翼で限りなく広い世界へと飛び立つことができるように、又、人生に対応できる力が育成されるよう、様々な活動を通して試みております。その一方、専門図書館としても発展し、研究を促進する場ともなっています。あるいは又、子どもと大人のための文学館ともいえるでしょう。そのように歩みつつ、今年は開館60周年を迎えました。6月に記念式典と関連行事が催されましたので、最後の第五部に、そのときの行事を紹介させていただきます。

### 82. 開館 60周年を迎えて：館長クリスティアーネ・ラーベ博士あいさつ

5代目の現館長、クリスティアーネ・ラーベ博士(Dr. Christiane Raabe)です。2007年4月に就任しました。

IJB開館60周年にあたり、今年6月25日にイエラ・レップマン・ホールで式典が行われ、IJB財団理事長のあいさつの後、連邦政府ファミリー省、バイエルン州文部省、そしてミュンヘン市議会の方々の式辞、ラーベ現館長の謝辞が述べられました。

### 83. 開館 60周年を迎えて：招待客

館長のあいさつの後で、記念展示会に併せて、壇上で、子どもたちが、テオドール・フォンターネなどのドイツの古典的な詩を暗唱しました。

### 84. 開館 60周年記念展示会「子どもの詩&イラストレーション」展示会場前：展示会ポスター

開館60周年の記念展示会には詩がテーマに選ばれたので、言語部門スタッフは各国の児童詩の本を探し、欠本があれば、出版社より送っていただきました。展示会には「詩」という言葉の4か国語が並べられた「Gedichte, Poems, Básně (バシュネ), Shi」というタイトルがつけられましたが、バシュネというのはセルビア・クロアチア語、Shiはもちろん日本語です。ポスターはグラフィックデザイナーの館員が作成し、会場への入口や城の門に立てかけました。

このポスターのモチーフを御存じのかたはいらっしゃるでしょうか。モダンアートの芸術家で、絵と特にオノマトペを扱ったユニークな絵本などで知られている、元永定正のアンソロジー『ちんろろきしし』（福音館書店、2006年）のなかの1編につけられたイラストです。詩の形式、作風はいろいろありますが、選び抜かれた一つ一つの言葉を巧みに繋げて成り立つ詩の本質をシンプルに表現し得ているとも考えられ、又、様々な国の作品が集められた展示会には大変良く合うモチーフでもあり、この絵が選択されたことに私は大変幸せな気分になりました。

### 85. 開館 60周年記念展示会「子どもの詩&イラストレーション」

この展示会には、単に優れた詩の紹介に留まらず、その内容が画家によって、どのように視覚的に解釈されているのか、という観点で100タイトルが選ばれ、ドイツ語以外の作品はスタッフがそれぞれ翻訳し、会場に貼りました。また、CDを作り、原語で聞くこともできるようにしました。本そのものは自由に手にとって観賞できます。日本の詩をいくつか御紹介します。

### 86. 開館 60周年記念展示会「子どもの詩&イラストレーション」：日本の詩 1

正面、上の二つは、谷川俊太郎のアンソロジー『なんだかうれしい・増補版』（福音館書店、2002年）の2編に元永定正が抽象的な絵画表現をしています。この本は子どもの内面から発露するうれしい気持ちが詩となり、日常の生活での、生きる喜びが伝わってくる作品ですが、谷川俊太郎の文に触発され、自ら子ども読者がそれに続けてもっと長い詩に完成させるとか、いろいろな可能性が含まれています。

右の壁には自然を扱う詩が数点並んでいますが、毛筆の詩文は「風はきのうと今日をつなぐ」というテキストのみです。深い意味が凝縮されている、大変日本的な、素晴らしい詩だと思えます。『月人石』というタイトルのアンソロジーの写真絵本からです。（乾千恵書、谷川俊太郎文、川島敏生写真、福音館書店、2005年）

## 87. 開館 60 周年記念展示会「子どもの詩&イラストレーション」：日本の詩 2

国際アンデルセン賞受賞作家のまど・みちおの作品「きりんはきりん」です。詩の絵本『まどさんとさかたさんのことばあそび』（かみやしん え、小峰書店、1992年）からの1編です。会場のこのコーナーには動物がテーマの詩が集まっています。日本のすぐれた詩はテーマは何であれ、他にたくさんありますが、いわゆる子どもを直接に対象として、絵の力も強い例がなかなか見当たらず、作品選びに苦労しました。

## 88. 開館 60 周年記念展示会「子どもの詩&イラストレーション」：日本の詩 3

手前はポスターのモチーフになった『ちんろろきしし』からの4篇です。それぞれの詩は50音がばらばらにされて、それが順不同に数珠のようにつながれ、あたかも太古の原始人のことば、あるいは超文化的な宇宙人のことばというか、根源的、かつ抽象的な音の繋がり成り立つ不思議な、そして遊び心一杯のアンソロジーです。ミュンヘンの国際日本人学校の4年生クラスを案内したとき、皆夢中になって読み上げておりました。

後方の壁、右上は、まど・みちおの「いなご」です。「絵本かがやけ・詩」シリーズの1巻『レモン』（小池昌代編、村上康成画、あかね書房、2007年）からです。下の作品は古今の日本の俳句にコルデコット賞受賞者のエズラ・ジャック・キーツがコラージュ手法で絵を作成した、美しい俳句絵本からの一茶の句です（『春の日や庭に雀の砂あひて』偕成社、1999年）。ほかに金子みすずと太田大八のコンビで「つめたい雪」（『どっさりのぼく』あかね書房、2007年）、黒田三郎と柚木沙弥郎コンビの「紙風船」（『おーいぼぼんた』福音館書店、2001年）なども出展されました。ほかの国と比較すると、日本の詩の本の特徴もよく浮き出しました。

## 89. 開館 60 周年記念国際作家画家フォーラム「子どもの詩&イラストレーション」：詩人パフォーマンス

開館 60 周年記念には専門的な国際作家・画家フォーラムが2日間に渡って催され、著名な詩人、作家、画家、児童文学専門家が招待されました。アンドリュー・フセック・ピーターズ (Andrew Fusek Peters) は新しい表現方法で10代の若手たちの共感を得ている若手の詩人、ストーリーテラーです。ユーモア溢れる彼はユニークなパフォーマンスで詩を披露しつつ、詩作品の出版化の難しさに触れ、出版社から彼の詩は“*It works at the stage but not on the paper*”と言われたよ、と一言コメントを付けました。

## 90. 開館 60 周年記念国際作家画家フォーラム「子どもの詩&イラストレーション」：出版人・編集者・評論家

一般的な文芸書、児童書と比べて、詩の本の出版は販売の点で出版社側にとっては冒険となりますが、詩のシリーズでそれなりに成功している出版社もあります。出版刊行の実際面での企画、姿勢、問題点を上げつつ、出版社社長、編集者、児童文学評論家の公開ディスカッションもプログラムに組み込まれました。

## 91. 開館 60 周年記念国際作家画家フォーラム「子どもの詩&イラストレーション」|JB 言語部門スタッフ

オーストリア、ドイツ、フランス、イギリス、オランダの詩人、画家、翻訳家、編集者、出版人、批評家などがそれぞれ話をする合間に、IJBの言語スタッフは自分の担当する国の現代詩人を3分間で短く紹介し、ドイツ、英米、フランス、ロシア、クロアチア、イラン、メキシコ、ブラジル、日本の詩なども朗読しました。私も日本の詩をドイツ語に訳し、原語と両方、披露しましたが、私はこのように解釈しました：

„Delfine“

Die Delfine, sind sie da?

Sind keine da, oder doch?

Sie sind nicht da, die Delfine

Wann sind sie da?  
Am Abend vielleicht?  
Soll ich wiederkommen?

Die Delfine, sind sie nicht da?  
Sind keine da, oder doch?  
Ja, sie sind da, die Delfine  
Und so viele!  
Sie schlafen  
Ob sie wohl träumen, die Delfine?

何だかお分かりになりますでしょうか。原詩を早口言葉で読みます。

「いるか」

いるかいるか  
いないかいるか  
いないいないいるか  
いつならいるか  
よるならいるか  
またきてみるか

いるかいないか  
いないかいるか  
いるいるいるか  
いっばいいるか  
ねているいるか  
ゆめみているか

この詩は日本の学校や家庭でも親しまれているので、あっ、谷川俊太郎の言葉遊び歌「いるか」だと気付かれた方もいらっしゃるでしょう。趣味的な美しい造本の詩集『ことばあそびうた』（福音館書店、1973年）から選びました。どの詩にも瀬川康男が近世の丹緑本の要素を取り入れて制作した素朴な木版画の絵がほどこされており、朗読の際はフォーラムの壇上で表紙絵をスクリーンに映写しました。詩は大変喜んでいただきました。

**92. 開館 60 周年記念国際作家画家フォーラム「子どもの詩&イラストレーション」：詩の朗読**  
60周年記念にはスイスのバーゼルに本部がある、国際児童図書評議会（IBBY）より、リズ・ページ事務局長が、アメリカからは IBBY の機関誌 *Bookbird* の編集長、ジルヴィア・ヴェアデル教授が出席されましたが、教授は詩も御専門とされていていらっしゃるのです。母国の詩も客演朗読してくださいました。

### 93. 開館 60 周年記念ファミリープログラム「詩を作って、絵も描こうよ！」：字体

詩という文学形式を子どもにもアプローチし、言葉に対しての感覚、感受性を高めたいと、又、詩が書物になるとき、どんな字体で表すべきか、などと、タイポグラフィー、グラフィックデザイン、ブックデザイン面でも意識してもらいたいと、週末のファミリープログラムでは、やや年長の子に、カリグラフィーのワークショップを提供しました。

### 94. 開館 60 周年記念ファミリープログラム「詩を作って、絵も描こうよ！」：詩

中庭に設置された大テントでは「詩の本の工房、詩のファクトリー」ともいうべき、セッションが設けられ、3歳からの子どもたちが、韻を踏んで詩作を試みるコーナーもあります。

### 95. 開館 60 周年記念ファミリープログラム「詩を作って、絵も描こうよ！」：詩画

ここでは詩画というべきか、詩に絵を描くことが中心になります。学校プログラム専任者がお手本として作った3枚が吊るされています。ちなみにその詩を日本語に訳すと、中央のそれが：

「お船の後ろにライオンが飛んでいるの？それともカモメ？」

となりますが、ドイツ語では：

Hinter Schiffen / fliegen/ Löwen / Oder Möwen?

そして右が：

「カエルがやぎをつかまえているの？それともハエ？」

ドイツ語では：

Frösche / fangen / Ziegen / Oder Fliegen?

となり、難しく考えなくても、ふさわしい単語を並べただけで、子どもらしい、かつ、立派に韻を踏んだ詩になります。幼い子どもでも、このような感じで、自分でも楽しく詩を作れるでしょう。

### 96. 開館 60 周年記念演劇ワークショップ“みんなで詩の世界を体験しよう！”：子ども劇場

中庭や貸出室で子どもたちが詩人や絵描きになっている間、ほかの子はイエラ・レップマン・ホールで、ジェイムス・クリュスやミヒャエル・エンデその他の詩人の作品を自分の体を使って、表現することに挑戦していました。劇団の俳優の朗読やお話の後で、その俳優先生の指導のもとで、詩の言葉や特定の場面を子どもたちはそれぞれ自由に自分なりに受け止め、声を出し、よく動き、駆け巡るなどの身体表現をとおして詩を体験しました。

### 97. 開館 60 周年記念：風船

子どもと、その家族も、作家や画家も、出版関係者や批評家も、教育者や研究者も、皆集まって開館 60 周年を祝いました。ファミリープログラムの最後には、子どもたちが一斉に空に向かって風船を飛ばしました。小さな紙が付けられて、そこには子どもたちが絵を描いたり、詩を書いたりしてありました。そして私たちはあらたに願いをかけました。

それは子どもたちに、たくさん本を読んでもらいたいこと。読書という行為そのものは受身であっても、思考力、想像力、感受性などが高められ、知識が増し、10代や大人になった時、厳しい現実、社会生活に対応できる力も備わっているのではないのでしょうか？

本は、切り口によって、文学、美術教育、演劇、そのほかいろいろな分野での活動の源にもなります。世界平和にも繋がる可能性もあります。そうした本の価値、存在を仲介し、組織的に促進、普及させるのが図書館の役割だといえます。ミュンヘン国際児童図書館も 60 年を経た今、さらに世界の方々と手を組み、また、共に発展できるよう願っております。

御清聴ありがとうございました。